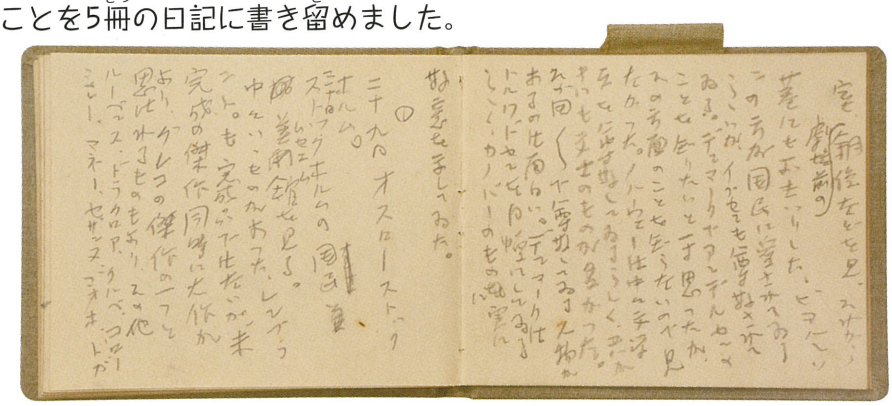
もっと知りたい 武者小路実篤

実篤、欧米へ行く

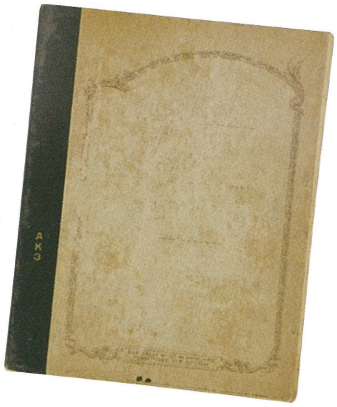
欧米旅行日記

船で横浜から出発し、アジアと中東を経て、40日かけてフランスに到着した実篤は、ヨーロッパに5ヶ月間、アメリカに2週間ほど滞在し、太平洋を横断して帰国しました。まさに一筆書きで地球を一周したのです。旅行中、実篤は見たことや感じたことを5冊の日記に書き留めました。



右：7月28日　ノルウェー・オスロでイプセンの墓を訪れた日の日記
左：7月30日　スウェーデンにて「ストックホルムの国民美術館を見る。中々いいものがあった。レンブラントも完成品ではないが、未完成の傑作、同時に大作があり、グレコの傑作の一つと思われるもの もあり…」

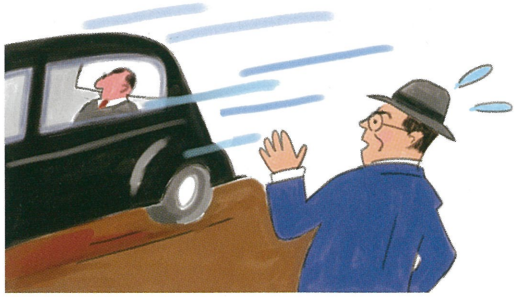
11月22日　アメリカ大陸を横断する汽車にて「今日は天気がよく、白雲のかけらも見えない。…中々いい山がある。他は雑草の野原である」

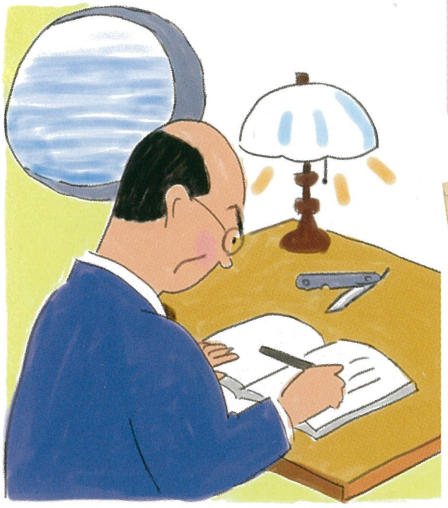


こんなこともありました…

（通りの反対側に友達を見つけ）往来に片足をおろした瞬間、目の前を全速力で自動車が通った。自動車がもう一秒おそかったか、僕が友達をもう一秒早く見つけたかしたら、僕は完全に自動車にやられていたろうと思う。

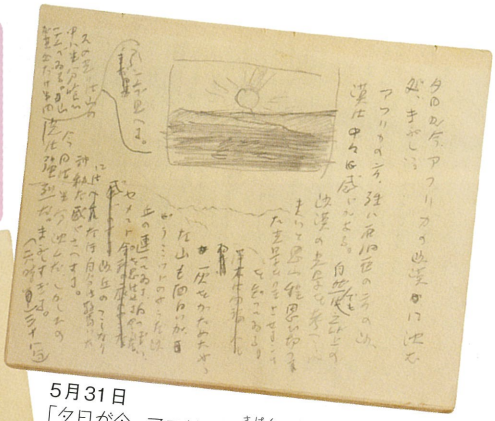
――『湖畔の画商』より





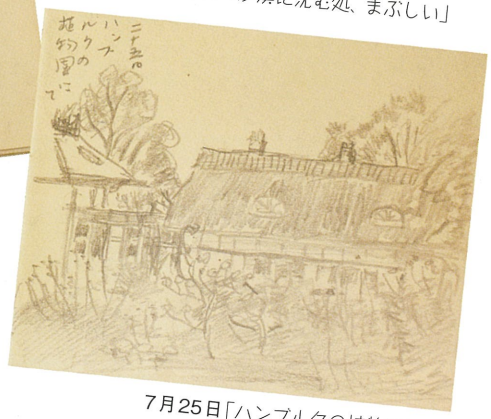
自分は今度の旅で、第一に感じたことは、友情である。…これをかいている鉛筆も紙も、又その鉛筆をけずるナイフも皆友の送りものだ。

——『欧米旅行日記』より



5月31日
「夕日が今、アフリカの沙漠に沈む処、まぶしい」

6月2日「ポートサイド所見」
絵には色がメモされています。



7月25日「ハンブルクの植物園にて」

異国の文化を体験し、多くの人と出会い、経験を重ねた実篤。旅先で見た美術作品をとおして芸術家の心にふれ、その美しさに感動しながら歩いた旅であったと振り返り、一つの詩を書きました。

一個の人間

自分は一個の人間でありたい。
誰にも利用されない
誰にも頭をさげない
一個の人間でありたい。

他人を利用したり
他人をいびつにしたりしない
そのかわり自分もいびつにされない
一個の人間でありたい。

自分の最も深い泉から
最も新鮮な
生命の泉をくみとる
一個の人間でありたい。

誰もが見て
これでこそ人間だと思う
一個の人間でありたい。

一個の人間は
一個の人間でいいのではないか。
一個の人間

独立人同志が
愛しあい、尊敬しあい、力をあわせる。
それは実に美しいことだ。
だが他人を利用して得をしようとするものは、いかに醜いか。
その醜さを本当に知るものが一個の人間。

——『湖畔の画商』より

『欧米旅行日記』
昭和16（1941）年3月　河出書房

『湖畔の画商』
昭和15（1940）年6月　甲鳥書林

『欧洲見聞記』
昭和11（1936）年12月　山本書店

帰国後、これらの日記をもとに3冊の本が出版されました。

発行日／令和3年7月17日　企画・発行／一般財団法人 調布市武者小路実篤記念館　〒182-0003 東京都調布市若葉町1-8-30　TEL.03-3326-0648
デザイン・レイアウト／今井三樹男　イラスト／矢口由美子　印刷／半七写真印刷工業株式会社